



教育にイノベーション！ － 3 つ の 挑 戦 －

～無限の可能性に挑戦する若者を育成する～

平成26年6月14日(土)
学校法人安城学園 理事長
寺部 暁



安城学園の『教育信条』

誰でも無限の可能性を持っている



政府の教育政策

▶ 教育再生実行会議

- 第四次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(平成25年10月31日)
 - ・ 達成度テストの導入
 - ・ 大学のガバナンス

▶ 文部科学省

- 大学教育再生加速プログラム(AP)
- 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)
- 中央教育審議会 高大接続特別部会
 - ・ 達成度テスト(基礎レベル・発展レベル)

など...

大学教育再生加速プログラム(Acceleration Program for University Education Rebuilding : AP)

平成26年度予算案 10億円【新規】

背景

- ・想定外の事態に遭遇した時に、そこに存在する問題を発見し、解決するための道筋を見定める能力をもった学生が社会及び企業から求められている
- ・学生の主体的な学びのための学修時間の不足

課題発見・探求能力、実行力といった「社会人基礎力」や「基礎的汎用的能力」などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するため、大学は教育内容を充実し、学生が徹底して学ぶことのできる環境を整備する必要

国として進める改革の方向性

「これからの大学教育等の在り方について」(教育再生実行会議 第三次提言 平成25年5月28日)

- ・教育方法の質的展開(学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習法(アクティブ・ラーニング)、双方向の授業展開など)
- ・全学的教学マネジメントの改善(学生の学修時間の確保・増加、学修成果の可視化、教育課程の体系化、組織的教育の確立など) → 国はこうした取組を行う大学を重点的に支援

「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(教育再生実行会議 第四次提言 平成25年10月31日)

- ・多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換 → 国は、メリハリある財政支援により大学を積極的に支援

支援部分【2階】

個別学部・学科の改革プロジェクトを申請

改革の方向性とプロジェクトの位置付け、重要性を明示した上で

大学全体としてこれからの改革の方向性を提示

大学自らで改革【1階】

教育改革の状況

テーマ① アクティブ・ラーニング

学生の能動的な活動を取り入れた授業内容・方法の改善

(標準型)20,000千円×8件
(複合型)28,000千円×8件

テーマ② 学修成果・指標モデル

- ・学生の学修成果を把握しそのデータに基づく授業改善
- ・学生自身も自らの学修成果を把握した上で次の学修をデザイン

(標準型)20,000千円×8件
(複合型)28,000千円×8件

テーマ③ 入試改革・高大接続

- ・志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価する入学者選抜方法の開発・実施
- ・アドバンスド・プレースメントの実施

(入試改革)20,000千円×8件
(高大接続)18,000千円×4件

○大学等(大学、短大、高専)は、各テーマに合致したプロジェクトを申請(1大学1申請)

○文科省は、各テーマ毎、各テーマ共通の評価指標を事前に設定(それ以外に各大学個別の評価指標の設定は必須)

○客観的な指標を用いて効果を明確にし、成果が見られなければ補助金の減額等を実施

○支援期間は5年間(ただし、4年目・5年目は補助金を1/3・2/3ずつ逦減し、補助期間終了後のソフトランディングを促す)

これまでの教育改革の取組状況について、事前に設定した基準をクリアした大学等のみ審査対象

- ・全学での単位の上限設定(CAP制)
- ・シラバスの充実(内容まで評価)
- ・全教職員へのFD・SD
- ・ティーチング・アシスタントの充実
- ・全学でのGPAの充実(利活用まで評価)
- 等

平成26年度予算案 34億円
(平成25年度予算額 23億円)

1. 背景 <大学に対する期待>

- 地域の課題解決に応える教育研究を行ってほしい。
- 学生が地域社会に出てから役立つ学びに力を入れてほしい。
- 教員個人のつながりから、大学が組織的に取り組む連携体制に発展させてほしい。



<大学が地域の課題解決に取り組む意義・効果>

- ◎大学が地域の再生・活性化に貢献
- 大学が地域の課題をより直視 → 教育研究の活性化
- 学生が地域の課題解決に参画 → 学生の実践力育成

2. 事業のねらい

全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、
→学長のリーダーシップの下、大学のガバナンス改革を推進
→各大学の強みを活かした大学の機能別分化を推進

3. 支援対象と目標

- ・自治体等と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学(短大・高専を含む)が対象(自治体・大学ともに、複数・単独があり得る)。
- ・学内組織が有機的に連携し、「地域のための大学」として全学的に地域再生・活性化に取り組み、将来的に教育カリキュラム・教育組織の改革につなげる。
- ・地域の課題(ニーズ)と大学の資源(シーズ)のマッチングや自治体・大学の協働による地域振興の取組を進める。

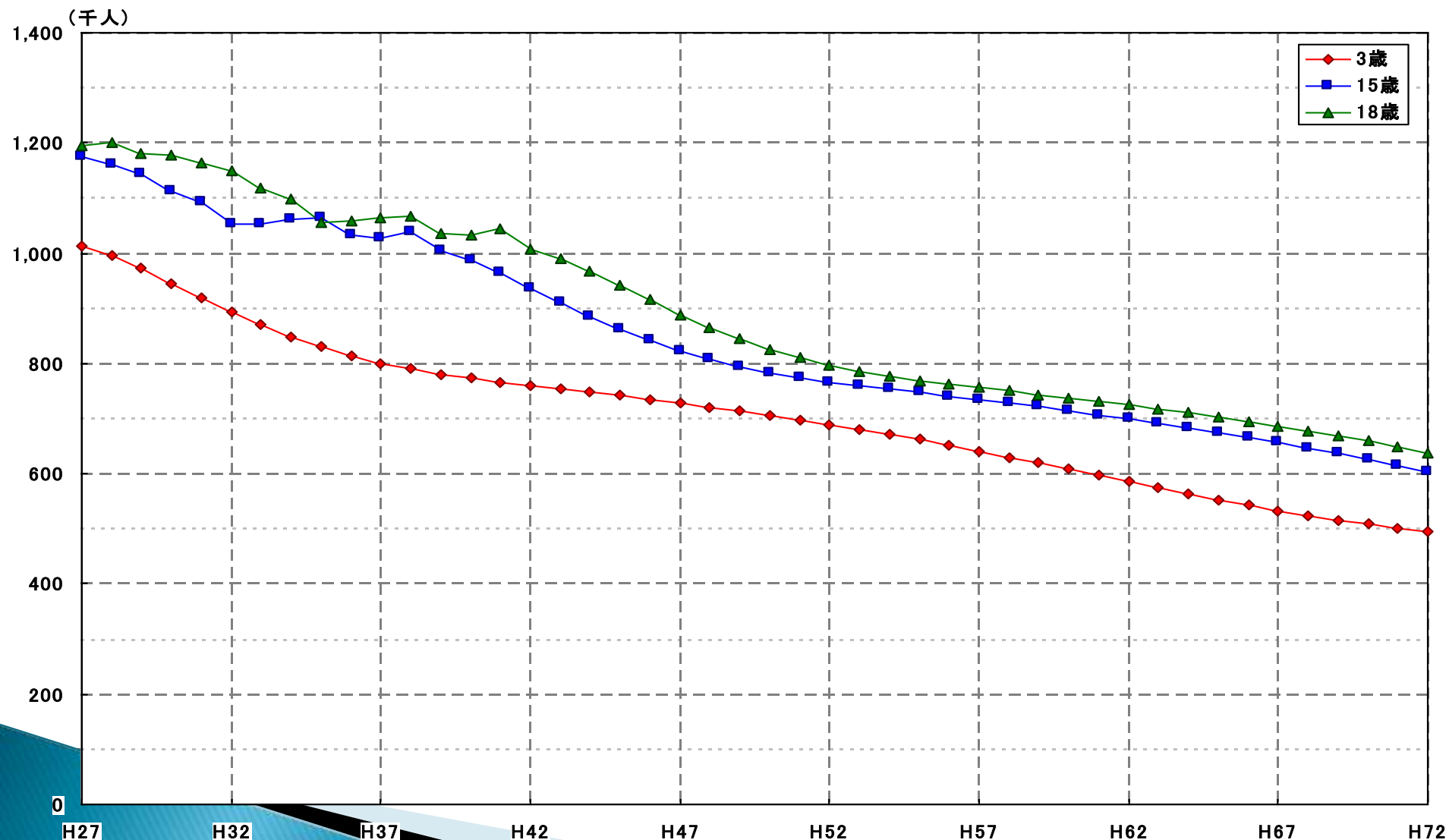
4. 支援条件

- ①全学的な取組としての位置付けを明確化(学則等の位置付け、全教職員へのFD・SDの徹底など)
- ②大学の教育研究と一体となった取組(地域志向科目の全学必修化など)
- ③大学と自治体が組織的・実質的に協力(協定、対話の場の設定など)
- ④これまでの地域との連携の実績
- ⑤自治体からの支援の徹底 -マッチングファンド方式-
(財政支援、建物無償貸与、人員派遣など)





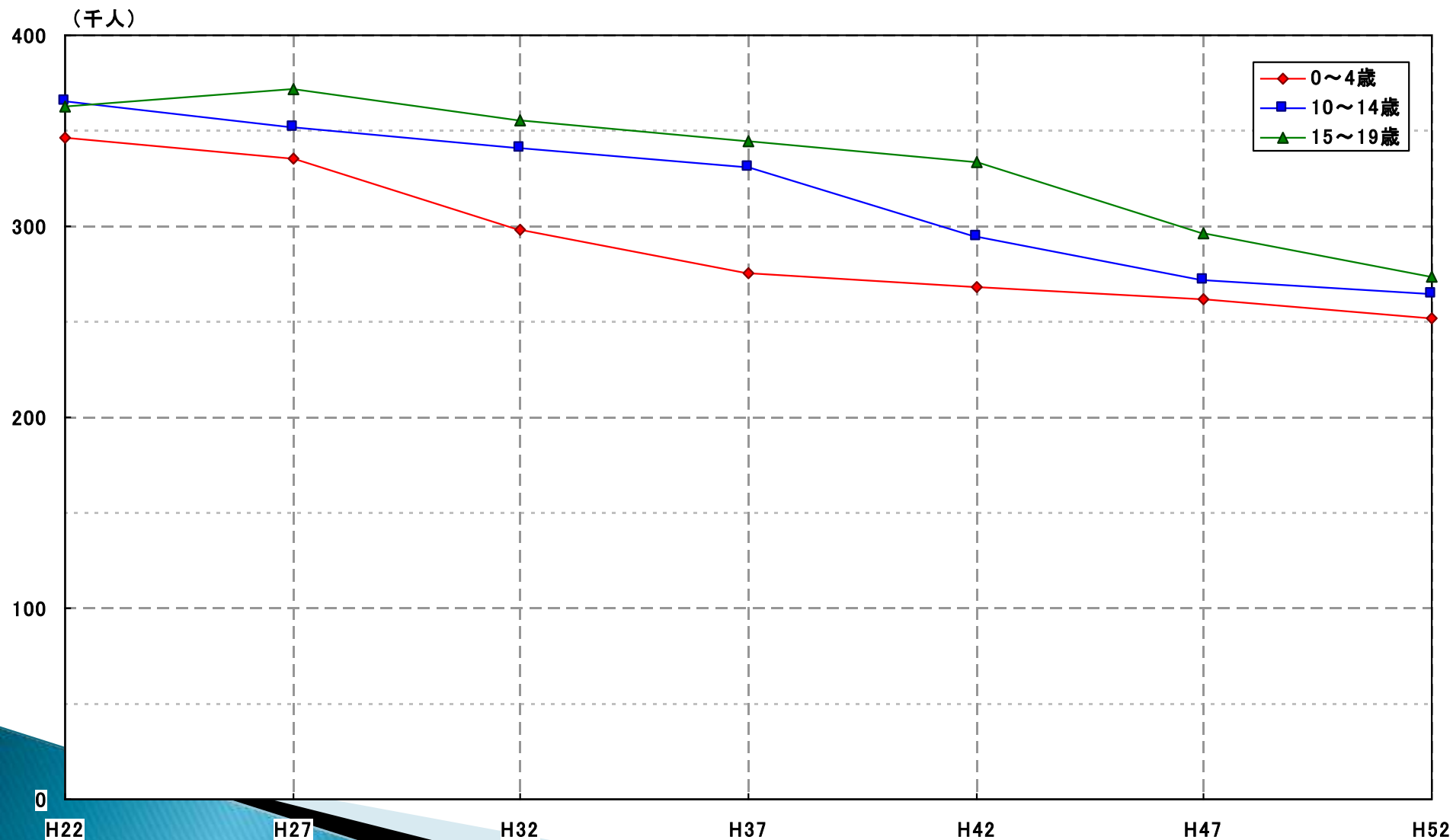
日本の 3歳・15歳・18歳の将来推計人口



国立社会保障・人口問題研究所発行『日本の将来推計人口(平成24年1月推計)』における「男女年齢各歳別人口:出生中位(死亡中位)推計」より



愛知県における 年齢(5歳階級)別将来人口推移

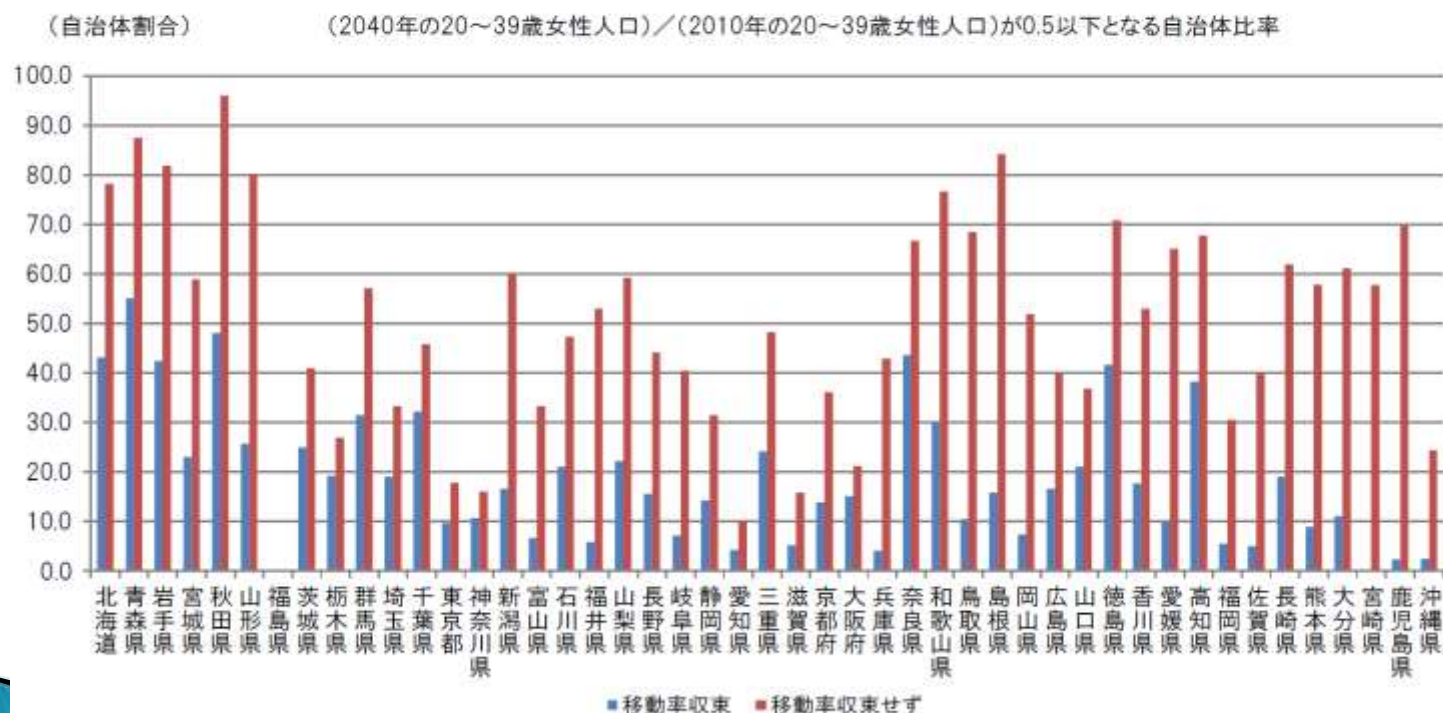




20～39 歳女性が半分以下になる 自治体比率(2010～2040 年)

○社人研の人口推計を前提とした場合、20～39 歳女性人口が 2010 年から 2040 年にかけて半分以下になる自治体比率は 20.7%

○さらに人口移動率が収束しないとする仮定を置くと、20～39 歳女性人口が 2010 年から 2040 年にかけて半分以下になる自治体数は 49.8%。



(備考)国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)」及びその関連データから作成



人口減少社会の到来

- ▶ 日本全体で人口が減少する中で、地域格差が拡大している。
- ▶ それぞれの地域の特性に応じた地域の再生・活性化が必要。
 - そのためには地域の特性に応じた「地域の人材育成」が必要。
 - さらに、そのためには地域の人材育成ができる「私たち教職員の成長」が必要。

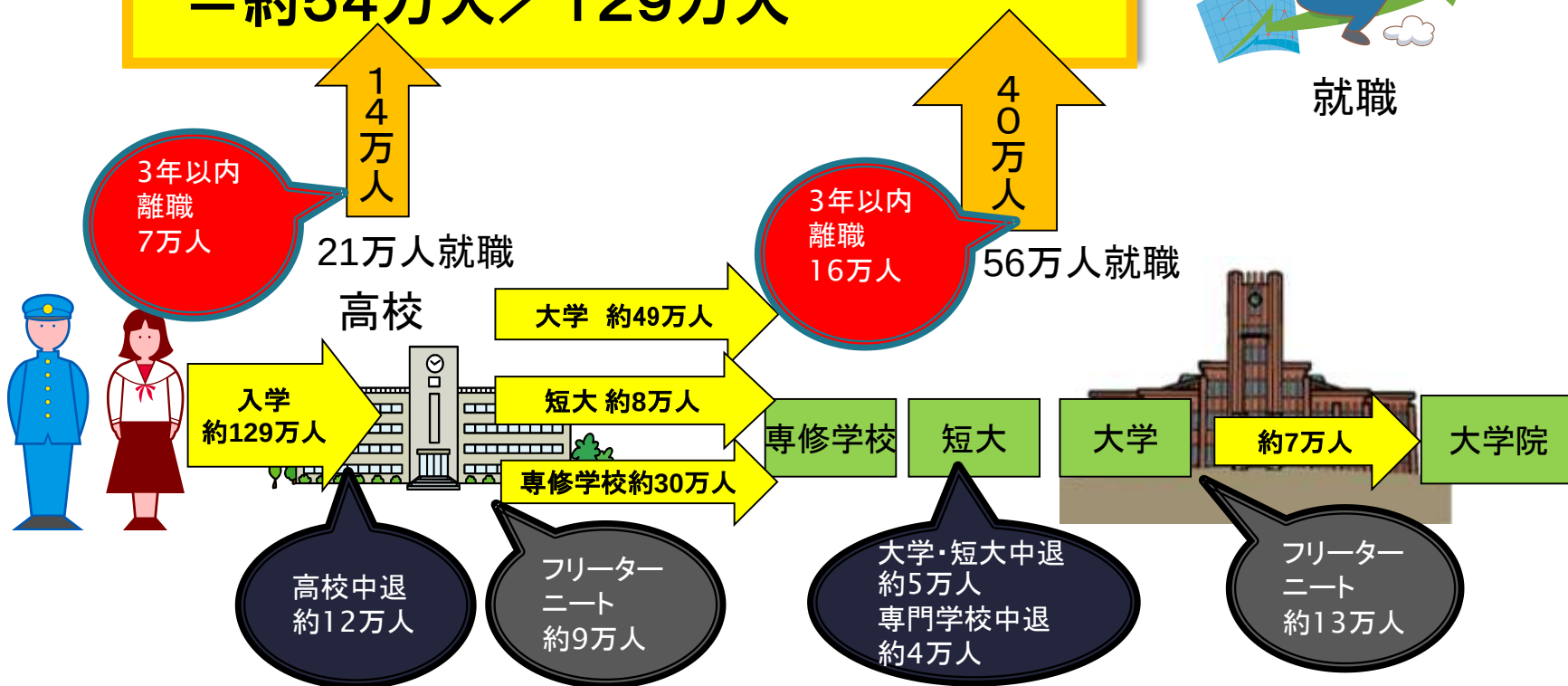


若者の就業実態(全国)

就職後、3年継続して定着した若者
=約54万人／129万人



就職



約75万人の若者が、一度は中退・離職を経験しながら、そこからはい上がらなければならない状況にある。

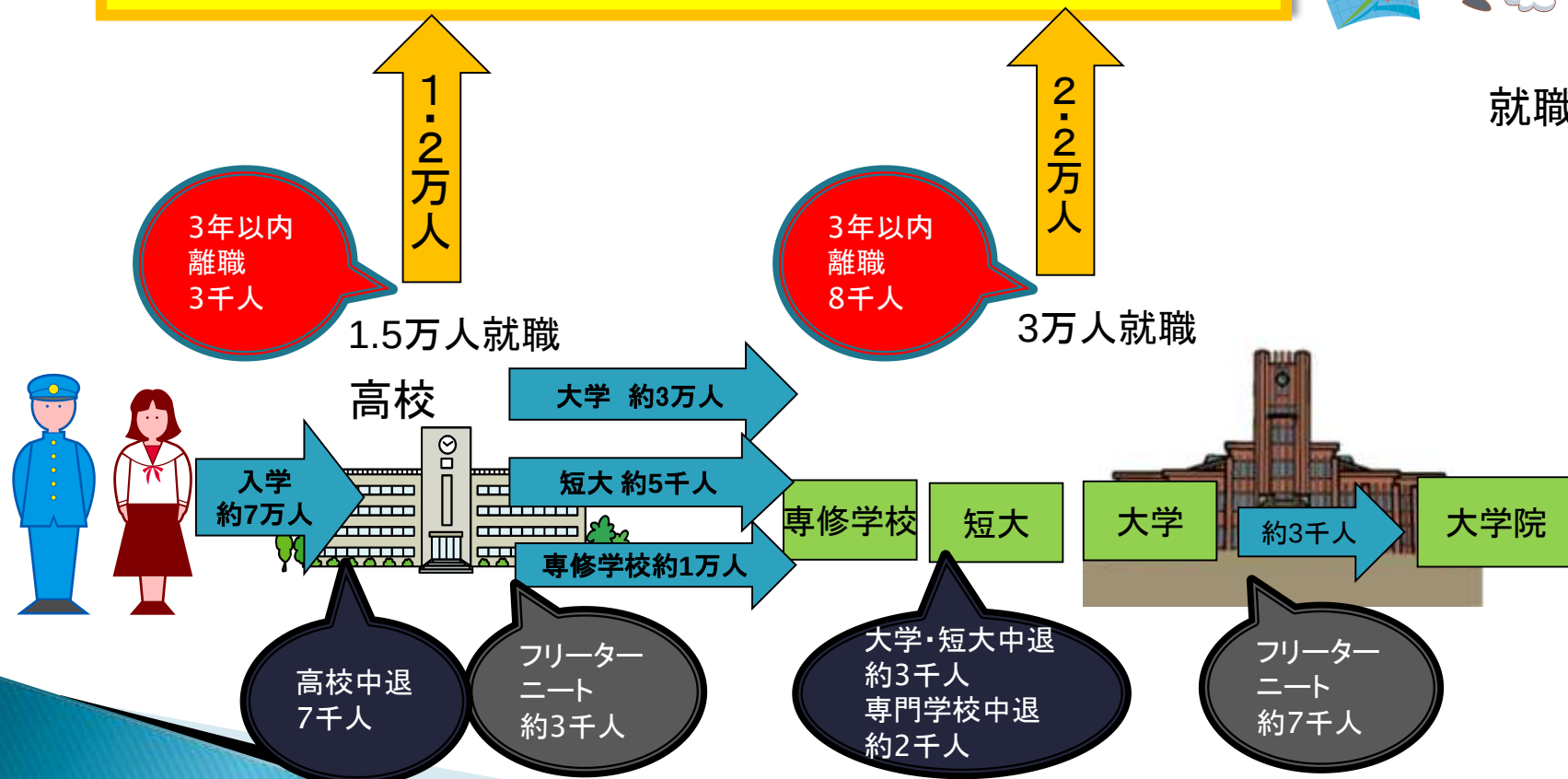


若者の就業実態(愛知県)

すんなり就職して3年継続できる若者
= 約3.3万人 / 7万人 = 社会を支える納税者



就職





学力の剥落

	獲得	活用	解決
60代以降			
50代			
40代			
30代			
20代			
大学			
高校			
中学校			
小学校			
幼稚園			



安城学園の『寄附行為』

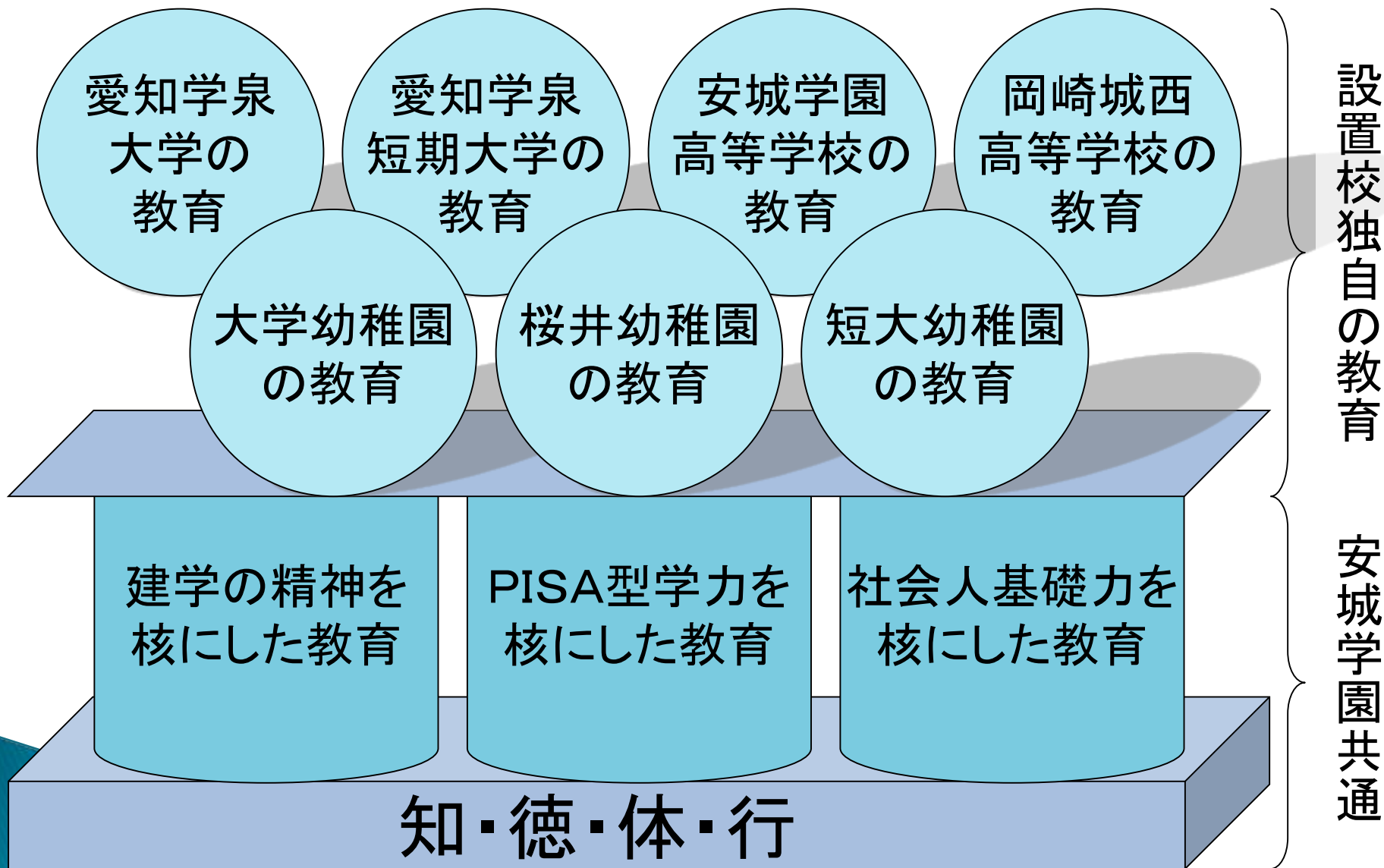
(目的)

第3条 学校法人安城学園は、建学の理念及び建学の精神に基づいて学校教育を行い、地域・社会に貢献する有為な人材を育成することを目的とする。

2 この目的を達成するため、教育基本法、学校教育法及び私立学校法に従い、これを行う。

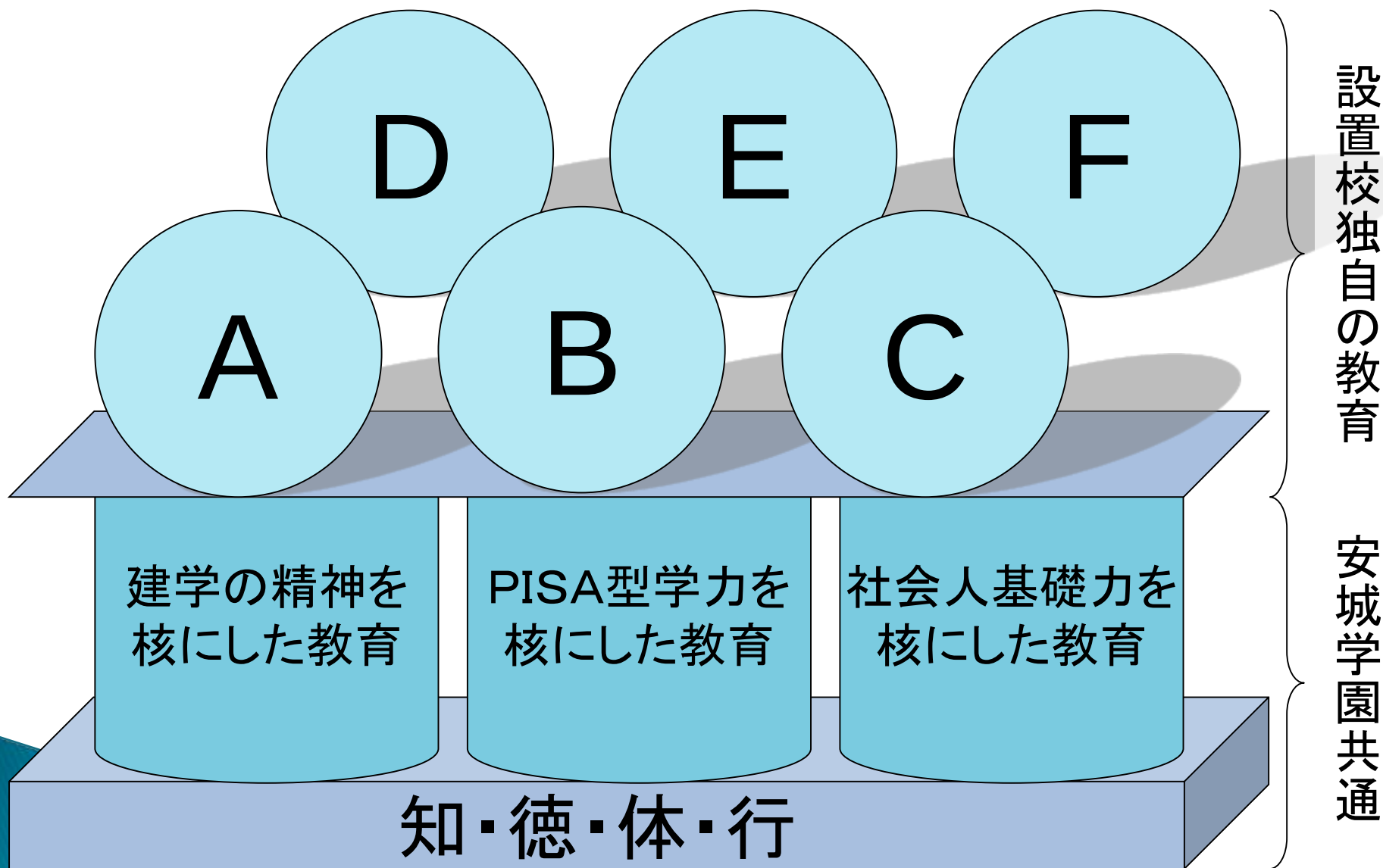


安城学園の『新しい教育モデル』①



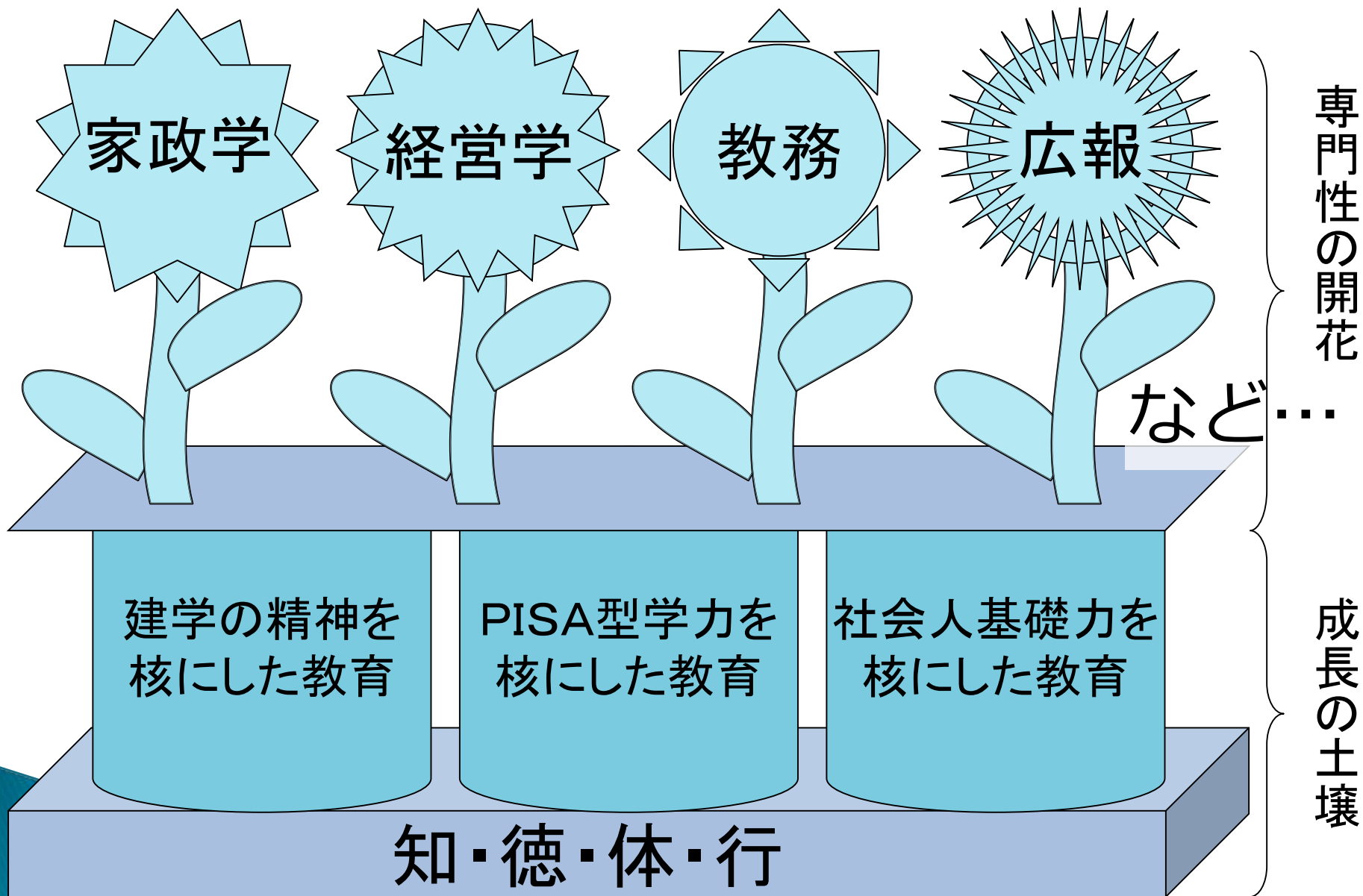


安城学園の『新しい教育モデル』②





安城学園の『新しい教育モデル』③





教員の役割の変化

ティーチング ⇒

- ▶ ティーチング
- ▶ ファシリテーション
- ▶ コーチング
- ▶ マネジメント
- ▶ コーディネーション
- ▶ スーパービジョン
- ▶ ディレクションなど...



ルーブリック評価の登場の背景

- ▶ 公平な絶対評価
- ▶ ペーパーテストで測れない学力の評価
- ▶ 潜在能力ではなく顕在能力の評価
- ▶ 社会人基礎力のような行動特性の評価
- ▶ 課題解決能力の評価
- ▶ パフォーマンスの評価
- ▶ 学ぶ意欲・学ぶ歓び・学ぶ意義につながる評価
- ▶ 学校の中の評価と社会の中の評価の連続性
- ▶ 評価基準の共有化

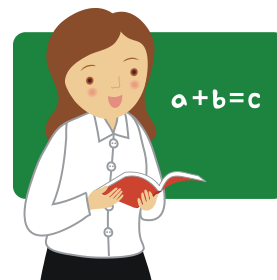


安城学園の『3つの事業』

- ▶ 学生・生徒・園児の潜在能力を開発する事業



- ▶ 教職員の潜在能力を開発する事業



- ▶ 地域の人々の潜在能力を開発する事業



『3つの挑戦』

- ▶ 第1の挑戦 ... 「苦手」への挑戦
- ▶ 第2の挑戦 ... 「得意」への挑戦
- ▶ 第3の挑戦 ... 「未知」への挑戦





『3つの挑戦』フレームワーク①

	学生・生徒・園児の 潜在能力を 可能性の限界まで 開発する事業	教職員の 潜在能力を 可能性の限界まで 開発する事業	地域の人々の 潜在能力を 可能性の限界まで 開発する事業
第1の挑戦 (苦手への挑戦)			
第2の挑戦 (得意への挑戦)			
第3の挑戦 (未知への挑戦)			

	建学の精神を 核にした教育	PISA型学力を 核にした教育	社会人基礎力を 核にした教育
第1の挑戦 (苦手への挑戦)			
第2の挑戦 (得意への挑戦)			
第3の挑戦 (未知への挑戦)			

	基礎学力	専門知識 専門技術	社会人基礎力
第1の挑戦 (苦手への挑戦)			
第2の挑戦 (得意への挑戦)			
第3の挑戦 (未知への挑戦)			

	前に 踏み出す力	考え抜く力	チームで 働く力
第1の挑戦 (苦手への挑戦)			
第2の挑戦 (得意への挑戦)			
第3の挑戦 (未知への挑戦)			



『3つの挑戦』フレームワーク②

	知	徳	体	行
第1の挑戦 (苦手への挑戦)				
第2の挑戦 (得意への挑戦)				
第3の挑戦 (未知への挑戦)				

	獲得	活用	解決
第1の挑戦 (苦手への挑戦)			
第2の挑戦 (得意への挑戦)			
第3の挑戦 (未知への挑戦)			

	第1 ステージ (教室)	第2 ステージ (学校)	第3 ステージ (地域)	第4 ステージ (海外)
第1の挑戦 (苦手への挑戦)				
第2の挑戦 (得意への挑戦)				
第3の挑戦 (未知への挑戦)				

	幼稚園	高校	短期大学	大学
第1の挑戦 (苦手への挑戦)				
第2の挑戦 (得意への挑戦)				
第3の挑戦 (未知への挑戦)				



建学の精神を核にした業務の推進

組織の内部

努力 D	努力 C	努力 B	努力 A	努力 S
奉仕 D	奉仕 C	奉仕 B	奉仕 A	奉仕 S

教職員

組織の外部

感謝 D	感謝 C	感謝 B	感謝 A	感謝 S
---------	---------	---------	---------	---------

保護者 中学校教師
地域の方々 高校教師
社会の方々 など...

※「S」「A」「B」「C」「D」は、『真心』の込め具合を表す。



社会人基礎力を核にした業務の推進 ー課題解決のためのPDCAサイクルー



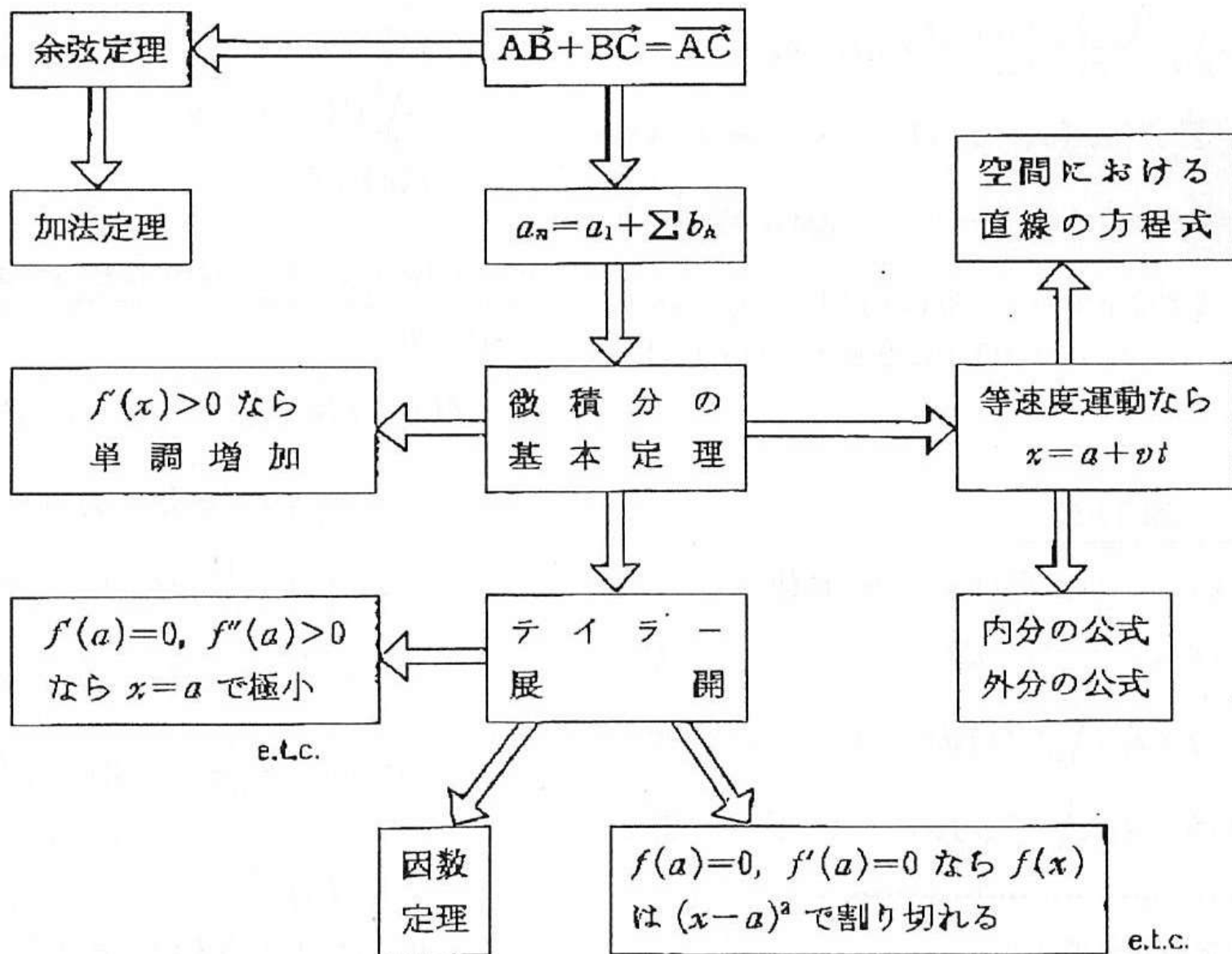


PISA型学力を核にした業務の推進 ー課題解決のための4Kサイクルー





教育内容にイノベーション！





安城学園の『教育信条』

誰でも無限の可能性を持っている



ご清聴
ありがとうございました。